

【論文】

武者小路実篤中期作品の問題点  
——小説「不幸な男」を視座として——

寺澤 浩 樹

概要

武者小路実篤の中期（大3～6）作品群において、素材を同じくする戯曲「罪なき罪」（大3・3）と小説「不幸な男」（大6・5）の二作品は、他の諸作品を挟む時期に位置する。その中には、小説「彼が三十の時」（大3・10～11）、戯曲「その妹」（大4・3）、戯曲「ある青年の夢」（大5・3～11）など、戦争への作者の関心が反映された著名な作品が多く、この中期が「ヒューマニズムの時代」と呼ばれるゆえんである。しかし、小説「不幸な男」の特質として、戯曲「罪なき罪」から小説「不幸な男」への変容の根底には、〈死のリアルな表現〉の意図があること、その素材のデフォルメの意図には、モデルの〈苦境と苦悩の明確化〉があること、その主題は、〈神ならざる凡人には重すぎた運命〉であり、その情調は、〈厳肅な暗澹たる悲哀〉であることなどから、小説「不幸な男」という視座からは、この中期には、〈死の認識〉のモチーフが明瞭に見える。それが、「非戦」的と言われる諸作品を芸術として成立させる礎であり、武者小路独自の運命の観照なのである。

キーワード… 武者小路実篤、不幸な男、罪なき罪、白樺、運命

一 はじめに

すでに自著『武者小路実篤の研究——美と宗教の様式』（平22・6、翰林書房）で示したように、私は、同人誌『白樺』廃刊までの武者小路実篤の文芸活動を、次の四つの時期に分けて考えている。すなわち、

『白樺』創刊以前の初期（習う）時代（一九〇四（明治三七）年から一九〇九（明治四二）年までの六年間）、『白樺』創刊後の前期（創る）時代（一九一〇（明治四三）年から一九一三（大正二）年までの四年間）、および中期（待つ）時代（一九一四（大正三）年から一九一七（大正六）年までの四年間、および後期（祈る）時代（一九一八（大正七）年から『白樺』廃刊の一九二三（大正一二）年までの六年間）である。そして、その中期（待つ）時代の特色を、私は「〈神〉への長い道・運命の観照」とした。

さらに、この中期の特質については、「人類」の時代あるいは「ヒューマニズムの時代」と呼ばれているが、筆者は一九一五（大正四）年の戯曲「その妹」、あるいは一九一七（大正六）年の小説「不幸な男」の存在に着目して、この時期に現実認識のモチーフがあることを指摘しておきたい。それによって「自己を生かす」哲学の文芸上の実践としての生命力表現が試されたと考えることができるのである」（前掲書、38頁）と述べた。

本稿では、その小説「不幸な男」の分析を通して、

そこで述べた「現実認識のモチーフ」の内実が、〈死の認識〉のモチーフであることを明らかにし、中期（待つ）時代の特色である「〈神〉への長い道・運命の観照」の意義を再考したいと思う。

最初に、その書誌を確認しておく。小説「不幸な男」は、一九一七（大正六）年三月に脱稿、翌々月の『新公論』五月号に発表された。また同じ五月には、新潮社による「新進作家叢書」の第一回配本である『新しき家』に、小説「芳子」（『白樺』明44・11）、「新しき家」（『新潮』大5・10）とともに収録、刊行された。さらにその二ヶ月後の七月には、武者小路手作りの「我孫子刊行会本」の第三集として『不幸な男』という冊子名のもとに、書簡体小説「AよりC子に」（複製初出稿の再編成）、戯曲「ロダン」接吻の来た夢」（初出時「夢」、『白樺』明43・11）、戯曲「或る日の出来事」（『新家庭』大5・4）の三編とともに収録、刊行された。

次に、その梗概を簡潔に記す。〈内〉は章を指す。主人公の真面目な男、田島は大学卒業の少し前に、親友の山村から結婚相手を紹介された。山村夫妻には

一年後に子ができたが、田島夫妻にはできなかった。妻に内緒で医者診断を受けた田島は、自分が子のできない身体だと知った。山村は時々田島の留守に一人で訪れ、妻のもとに長居することがあり、田島はそれを不愉快に思っていた。(二〇六)。

ある日、妊娠したかもしれないと言う妻に、田島は驚愕して自分の身体のことを告白した。医師の妊娠三ヶ月以上という診断により、妻への疑いは決定的となった。山村は関係を持った女に田島を紹介して結婚させた上に、その後も密かに交際を続けていたのである。田島は妾を持って家を空けるようになったが、心は落ち着かなかつた(七〇十二)。

ある日、訪ねてきた山村夫妻と妻の笑い声に激怒した田島は、庭に向けてピストルを発砲し、妾宅に向かった。折り悪しくも、妾が後に誤解とわかつた妊娠の可能性を田島に告げると、逆上した田島は妾を足蹴にして自宅に戻り、ついにピストルを自らの額で当てて発砲した(十三〇十五)。

## 二 小説「不幸な男」の構成と主題、情調

この小説は全部で一五の章から成るが、その内容に注目すれば、(七)の、妻からのあり得ぬ懐妊報告という事件の発生を境として、前半と後半に分けられるだろう。

前半、すなわち(一)から(六)までは、導入の(一)と(二)、時空間的に独立した挿話の(三)、そして一週間の時間が連続する(四)から(六)までの、計三つの部分から成るが、これらはまとめて「発端」として良いだろう。

後半、すなわち(七)から(十五)までは、約一ヶ月間の時間がほぼ連続する(七)から(十二)まで、そしてそれから約一ヶ月を隔てて終末に向かう(十三)〜(十五)の、計二つの部分から成る。これらはそれぞれ、「展開」、「結末」として良いだろう。

なお、(十)および(十四)は文科の友の家、そして(十二)は妾宅であって空間的に独立しているが、それぞれ筋展開に与える影響から考えても、構成上の節目と言えるほどの重要性は持ち得ていないと思われる。

る。

次に、この小説の時間は、短くておよそ二年間弱、すなわち二五歳の主人公田島が大学を卒業した夏頃から、ピストル自殺を遂げた、二年後の春頃までの期間にわたる。短くて、と言うのは、(三三)の「ある正月」までの期間が不明であるためで、これを長く考えれば、全体は三年間かそれ以上の期間となる。

いづれにせよ、田島の自殺はこの「ある正月」に続く春のことと考えられるので、この小説の時間の大半は、その四、五ヶ月間に集中して、事件の展開と、それにもなう田島の心情と行動が、濃密に描かれていると言える。

なお、山村夫妻との観劇に関する(四)から(六)までの、およそ一週間にわたる挿話は、「肩かけ」購入という内容から見て、寒い季節と推測される。したがって、それは(三三)の「ある正月」に比較的近い時期であることとなる。そして二、三ヶ月後の(七)の妻の懐妊報告からの時間を逆算すれば、(四)の田島の疑心は外れていなかった、ということになる。

また、この小説の主な空間は、それぞれ、(裏切られ

た幸福)としての田島の家、(不吉の予兆)としての鶴沼の別荘、そして(満たされぬ逃避)としての妾宅、そして(果たされぬ救い)としての文科の友の家、というモチーフを持つものと考えられる。これを登場人物の側から見れば、主人公田島を中心として、田島の家と鶴沼の別荘には、(悩める妻の時子)と、その裏側には(不貞の山村)が見える。妾宅には(無邪気なてる)が、文科の友の家には(心優しき友)がいる。

さて、この小説「不幸な男」の内容をごく簡単に要約すれば、妻を親友に妊娠させられた男が、絶望の果てに自殺するという話である。いわば、深い憐れみと恐れに満ちた悲劇的なるもの一種ではあるが、この小説には浄化(カタルシス)があまり感じられない。たとえば、同じ武者小路による小説「友情」(大8・10〜12)や戯曲「その妹」(大4・3)などのように、異なる高い価値の厳しい対立などによる劇的緊張は生み出されない。その理由は、主人公田島の身に起きた事件の深刻さに比して、その人物造型が有能高貴とは言えないからである。むしろ逆に、主人公田島が、その平凡な性格ゆえに、重苦しい境遇に押し潰されてゆく綿密な描写

からは、この小説が、解決なきリアリズム小説に見えるほどである。

ただし、この小説の題名が「不幸な男」であることには、「不幸」ならざるべき意義が、逆説的に暗示されていると考えることができる。それは〈十〉と〈十四〉の二度にわたって登場して助言を与えている、文科の友の次のような助言に表れている。

「僕か、僕は君達と本職がちがうからね、道徳も少しちがうかも知れないがね。その細君の心をきけるだけ聞いて夫の人が同情が起り得れば、許せばいゝと思ふね。さう云ふ罪はどうかすると一寸した出来心で起らないとも限らないからね。(中略) 罪をあまり重く見すぎて女の一生をすたらすことを僕はすゝめるわけにはゆかないのだ。」(十)\*

友の言葉は道理にかなっているが、しかし有能高貴ならざる平凡な人間の田島は、やはり妻を許せなかった。離縁はしなかったものの、妾を持って家を空けるようになった。友の助言は無駄になったのである。

そして〈十四〉では、「家庭が不幸だったから妾をおいた」という田島に対して、友は「そしてなほ不幸になると云ふことを君は知らなかったのかね」とやり返す。しかし、それまで田島の友人のこととして聞いていた話が、田島自身のことだとわかり、「時々この世がいやになることもあるよ」という田島の吐露を聞くに及んで、友は顔色を変えたかのように「尤だ。だけど死んではいけない。妾を何人おいても生きてゐる方がいい。」(中略) 女のこと許りが人生ぢやない。他人の出来心のために死ぬのは馬鹿げてゐる。死んではいけない」と熱心に説得する。しかし、すでに避けがたい不吉な運命に囚われていた田島には、その助言もすでに無駄であった。

不貞な友人に紹介された妻の、友人と共に犯した過ちにのみ意識を集中して決して許そうとはせず、その腹いせに妾を持ちながらも、結局は「僕達は誰の為に働いてゐるか」と云へば妻子の為に働いてゐるのだ。妻子がすべてなのだ、大概の人はそのすべてのものを失なったら生きてゐられる人間は少ないよ。」(十四)と狭い女性観、家庭観、そして人生観に自らを閉じ込め

ていく。<sup>\*2</sup> そのような田島の行き着く先は、絶望としての死である。

このように、田島が「不幸な男」たらざるを得なかったのは、その性格、人物造型よりも境遇の不運が、はるかに勝っているためである。したがってこの小説は、境遇悲劇ないし運命悲劇的なものと言えるだろう。そこで、この小説の主題を、〈神ならざる凡人には重すぎた運命〉としたいと思う。

次に、この小説の末尾の叙述に注目しながら、この小説の情調を検討したい。

田島は遺書に「俺は生きてゐるのがいやになつた。皆の罪は赦す」と書いたが、それは捨てた。その後、「ピストルをぼんやり無心に見て」「気味のわるい微笑」を見せる。それは「罪」を「赦す」どころか、自らの死を代償とした復讐という、暗い快楽に思い至つたためだろうか。再び「俺は死にたくなつた」と遺書を書きかけるが破り捨て、「彼の頭は狂ふやうに」「はりさけるやうになつた」。複雑な感情の絶頂に達したのである。次の引用は、そこから末尾までのすべてである。

俺は生きてゐたくない、この世に生きてゐたくない。俺はこのピストルで頭をうつ、皆はさぞ驚くだらう。俺は笑つてやる。

彼はピストルを額にあて、そしてひき金をひいた。次ぎの瞬間に彼は死んで横つた。

妻はピストルの音をきいた。しかし彼女は夫を恐れた。ちつと次ぎに聞えてくる音に耳をすませた。何も聞えなかつた。今にも何か聞えさうな気がした。しかし何にも音がしなかつた。十五分以上も耳をすませた。目がくらみさうになつて妻はしやがんでしまつた。

かくて彼の死んだのは女中が夕食を知らせに行く迄誰も知らなかつた。不幸な男はかくて一生を終つたのだつた。 (十五)

「俺は生きてゐたくない、この世に生きてゐたくない。俺はこのピストルで頭をうつ、皆はさぞ驚くだらう。俺は笑つてやる。」という言葉が、田島の人生最後の考えだつた。自らの凄惨な死の姿をさらし出し、見せつけることによつて、「皆」すなわち山村と時に衝

撃を与え、それを嘲笑することで、復讐を果たそうと思つたのである。

主人公田島に焦点化された語りを中心に叙述されてきたこの小説の末尾では、語り手は、田島の内面と行為を、死して消え去る瞬間まで密着してくつきりと語りあげた後で、すかさず妻の時に焦点を移し、夫の自殺を確信せざるを得ない時間の心理と行為を語った後に、その失神によつて再び焦点を失うことで、「不幸な男はかくて一生を終つたのだつた。」という語り手自身の感懐を含ませ、この世界の幕を閉じる。つまり、この小説末尾の語りは、主人公から他の登場人物へ、さらにそこから語り手自身へ、という三つの層を移動し、結果として主人公田島が「不幸な男」であることを、私たち読者に明示して終るのである。後に詳述するが、このような死に至る過程のリアルな表現は、作者の大きな意図の一つでもあつた。

以上のように、この小説の余韻、情調は、〈厳肅な暗澹たる悲哀〉と言えるだろう。

### 三 戯曲「罪なき罪」から小説「不幸な男」へ

さて、この小説「不幸な男」(『新公論』大6・5)の最も大きな素材、すなわち主人公とその事件には、モデルがあつた。武者小路はこれを二度にわたつて作品化した。

最初は三幕ものの戯曲「罪なき罪」(『白樺』大3・3)<sup>4</sup>で、小説「不幸な男」の約三年前に発表された。その概要は次のようなものである。

広田という真面目な子爵の夫妻が、劇場で偶然ある男に出遭う。それは、妻が結婚前に一度だけ関係を持つた、元家庭教師の前島だつた。前島は夫への口止めと引き替えに、妻から有り金を脅し取る。妻の動揺から事実を推測した夫は、早産だつた子供が前島の子ではないかと妻を責め立て、訪問してきた友人を使って、妻に前島との過去と脅迫の事実を告白させる。広田は自ら前島と会つて金を渡し、妻と子に対する愛憎の激しい葛藤を経て、与えられた状況を受け入れて生きていこうとする。

小説「不幸な男」に似つつも、かなり異なつた筋で

ある。武者小路は自伝的小説「或る男」(二六七)〔改造〕大12・6)で、この戯曲「罪なき罪」の題名と内容とモデルの関係について、次のように書いている。

彼は「罪なき罪」と云ふ題をあまり好んでゐないが、それはこの脚本のモデルになつた自殺した友達のことを考へたからであつた。

その男は品行方正であつたために、妻が結婚する前に男を知つてゐたことに気がついた時、非常に心を苦しめた。勿論今の時代では自分が勝手に放蕩しながら、妻の結婚する前の品行を気にするのが習慣になつてゐるかも知れないが、自分が女をまるで知らなかつたことが、なほ相手の罪を強く感じることに成り得る。その相手を責めすぎるのを罪と見て、罪なき罪と一方つけた。又一方細君の方の罪も大した罪ではなく、一寸したあやまちで、男に身体をまかせ、身重になつてゐるのを知らずに彼の処に来た、それを罪なき罪と見てもいゝと思つた。しかしどつちにしても少し屈辱で面白くないがいゝ題もないのでそのまゝに

した\*<sub>05</sub>

このように、「罪なき罪」という言葉は、「自殺した友達」というモデルに対して、主人公広田とその妻の二人それぞれの「罪」の重さが軽減されたものだった。しかも、物語は主人公の生きる意志で終る。それが、武者小路がこの小説の題名を「あまり好んでゐない」という理由であろう。

さらに、この結末の主人公の生きる意志について、後に武者小路は、戯曲「罪なき罪」が最初に収録された創作集『彼が三十の時』(大4・2、洛陽堂)の「自序」に「追加」として「罪なき罪」の最後の処に「あんなことがなければ云々」とあるがこれは決論ではない。男らしき愛と我慢の加味された慰めの言葉である\*<sub>6</sub>。」とわざわざ追記している。問題の台詞は「あんなことがなければかうもお前を愛することは出来なかつたかも知れない\*<sub>7</sub>」というもので、確かにその台詞自体は、主人公広田の積極的な生への決意にも見える。そうではなくて、それは「男らしき愛と我慢の加味された慰めの言葉」だ、と武者小路は言う。つまり、主



人公の生に對する、より消極的な姿勢こそが、戯曲「罪なき罪」の創作意図だったわけである。

その意味で、この作品の創作のモチーフと結末に関する、次の武者小路の言葉は興味深い。

それに彼自身の妻が彼の前に男を知つてゐたことなどが原因になつてかいたものである。しかし彼は友の自殺する氣持を實感でかくにしては彼の自身の主観がまだ強すぎた。それで主人公を自殺させることが出来ずに生かすことにした。

「或る男」(一六七)

武者小路の当初の構想には、主人公広田の自殺があつたようだ。しかし、創作のモチーフには、武者小路自身の妻、房子に関わる思い\*<sub>8</sub>があつたため、おそらくその表現は叶つたものの、逆にモデルの人物、事件が持つていた、死というものの重みの表現には至ることができなかつたのである。

また武者小路は、「脚本では淋しい生きる道を示した。小説では死んだのを無理でなくかきたかつた。」(「序の

かはり」大6・7\*)と創作意図を述べているが、死に至るつづぎな過程の表現、すなわち(死のリアルな表現)こそが、約三年を隔てた後に、より主人公の内面を描きやすい小説というジャンルで、同じモデルによる作品を、再度書いたことの真意ではないだろうか。

#### 四 小説「不幸な男」の素材とその変形\*

小説「不幸な男」のモデルは、志賀直哉の従弟であつた。志賀の一九一三(大正二)年八月四日の日記には、「〇〇氏の葬式ある筈、俣はまで行く途その列に会ふ。(中略)〇〇の死は鉄砲の自殺といふ話をきく。妻の心持の残酷さが凄あはい感じがした。妾めかけといふ十六の女も見た。心の苦悶には縁ない女だつた。」と記されている\*<sub>10</sub>

この事件は『白樺』の作家たちに大きな衝撃と創作意欲を与えたようだ。志賀は、この事件のすぐ後に小説「范の犯罪」を書き、『白樺』(大2・10)に発表した\*<sub>11</sub>。武者小路の戯曲「罪なき罪」が発表されたのは、その五ヶ月後の『白樺』(大3・3)であつた。また、

その約三年後に、里見弴も同じモデルによる小説「恐ろしき結婚」(『太陽』大6・4)を発表した。武者小路の小説「不幸な男」(『新公論』大6・5)発表の前月になる。

モデルとなった人物は、志賀には従弟であっても、武者小路にとっては、別の意味で親しい、幼馴染みであった。先に引用した自伝的小説「或る男」(一六七)には、「学習院の初等科の時彼と同級で、初等科卒業の時は一番だった。その後大病して学校をやすみ、一年級がおくれたが、彼とは学校の帰りよく一緒に来た。」とあるが、「モデルとはちがう境遇とちがう性質の人間にした。」(『序のかはり』)と説明されているように、小説「不幸な男」本文は「山村も田島も学習院に居た。田島はおとなしい身体のみならず、初等科卒業した。一度可なりひどい病気にかゝったことがあったが、幸に早くなほつて級はおくれなかつた。その時山村は田島の病気を心配してよく見まつた。」(二)と書かれていて、武者小路の実体験を元になしながらも、学年遅れや見舞い人の立場などには変形を加えていることがわかる。

また、「或る男」(一六七)の「その友は殺生なことが好きな男だったが、頭のいゝ、温和しい、自分の身体のことを常に気にしてゐる男だった。」という回想からは、モデルの鋭敏で内向的な性格や、小説「不幸な男」(三)の猫殺しの挿話などが思い出される。<sup>912</sup>

ほかに、「或る男」(一六七)では「死ぬ二三ヶ月前に久しぶりに彼の処へたづねて来た時、彼が不在で、別に気にもかけずにゐて一度電話をかけた時その友が不在だったので、そのまゝにして逢はなかつたことが、変に心のこりになつた。」と回想されているが、<sup>913</sup>小説「不幸な男」では、確定的な妻の妊娠に田島の苦悩が最も極まつた(十)、および自殺の一〇日ほど前の(十四)の二度にわたつて、文科の友の家を訪れて相談している。いずれも、武者小路がモデルから相談を受けたかったタイミングなのであろう。

また、モデルには「二人の子があつた」ことに續けて「小説で男に子供が出来ないやうにかいたのはある雑誌に、子供の出来ない男がわりに沢山あるやうに書いてあつたので、それを借りた。さうする方が自分のあらはしたいものをはつ切りあらはすことが出来さう

に思つたので。」(「序のかはり」と説明されている。この点は、前作「罪なき罪」とも大きく異なっていて、「子供の出来ない男」という設定により、田島が落とし込まれた苦境、すなわち親友と妻に裏切られた幸福というモチーフが、より明確にされたことになる。

また、志賀直哉の談話『范の犯罪』に就いて(『現代』昭10・3)では、モデルに関する、さらに詳細な事情が明かされている。興味深いのは、「Aは一方に若い子供のやうな十四五くらの妾めかけなんかを持つたりして、何かで自分をゴマ化さうとしたが、どうにもならないで、たうとう死んだ。自殺する前からよくイラ／＼して、家のなかで鉄砲を打つたりしてゐた。自殺する時も、二階で鉄砲の音がしたので、その少し前に下へおりてきた嫁の母親が、『どうしたのだらう』といふと、嫁はたゞ『自殺なさつたのでせう』と答へた。<sup>\*14</sup>」という部分で、妾を持つ理由、家の中などで発砲する様子などは小説「不幸な男」に似ているが、自殺時の家族構成や様子などは、むしろモデルの方に独特な冷やかさが感じられる。

小説「不幸な男」という虚構フィクションにおける、これらの変形デフォルメ

の傾向を概括すると、モデルとなった人物や事件になり即しながらも、書き手ないし語り手の深い同情とともに、その「苦境と苦悩の明確化」がおこなわれた、と言えるだろう。

## 五 おわりに——小説「不幸な男」の意義

まず、この中期の武者小路の主要な戯曲、小説作品を挙げる。なお、言うまでもなく武者小路の主要な創作ジャンルとして「雑感」があるが、ここでは戯曲、小説に限った。また、戯曲「罪なき罪」と小説「不幸な男」はゴシック体と傍線で示した。

### 一九一四(大正三)年 満二九歳

戯曲「わしも知らない」(『中央公論』大3・1)

戯曲「二十八歳の耶蘇と悪魔」(『白樺』大3・2)<sup>\*15</sup>

戯曲「罪なき罪」(『白樺』大3・3)

戯曲「Aと運命」(『白樺』大3・4)

小説「第二の母」(『白樺』大3・4)<sup>\*16</sup>

戯曲「母親の心配」(『エゴ』大3・6)

- 戯曲「或る日の事」〔中央公論〕大3・7）  
 小説「死」〔東京朝日新聞〕大3・8・12・25）  
 小説「彼が三十の時」〔白樺〕大3・10・11）
- 一九一五（大正四）年 満三〇歳
- 小説「小さき世界」〔新小説〕大4・1）  
 戯曲「その妹」〔白樺〕大4・3）  
 戯曲「未能力者の仲間」〔太陽〕大4・4）  
 戯曲「三和尚」〔太陽〕大4・9）  
 戯曲「悪夢」〔中央公論〕大4・9）  
 戯曲「Aと幻影」〔白樺〕大4・11）
- 一九一六（大正五）年 満三一歳
- 戯曲「小さき運命」〔太陽〕大5・1）  
 小説（会話）「或る日の出来事」〔新家庭〕大5・4）  
 小説「姉（回想断片）」〔白樺〕大5・5）  
 小説「或る国の話」〔太陽の都〕大5・7）  
 戯曲「燃えざる火」〔太陽〕大5・9）  
 小説「新しき家」〔新潮〕大5・10）  
 戯曲「或る青年の夢」〔白樺〕大5・3、4、6、8、10、11、〔読売新聞〕大5・3・5<sup>\*17</sup>

一九一七（大正六）年 満三二歳

- 戯曲「日本武尊」〔中央公論〕大6・1）  
 小説「不幸な男」〔新公論〕大6・5）
- 戯曲「かちく山と花咲爺」〔白樺〕大6・7）  
 戯曲「AとB」〔太陽〕大6・9）  
 小説「ある母」〔新潮〕大6・9）  
 小説「ある父」〔中外新論〕大6・10）

さて、この中期において、戯曲「罪なき罪」と小説「不幸な男」はちょうど初めと終りの頃にあつて、他の諸作品を挟んでいる。その中には、小説「彼が三十の時」や、著名な戯曲「その妹」、大作戯曲の「ある青年の夢」などが含まれている。そして、一九一四（大正三）年と言え、誰しも気付くように、第一次世界大戦勃発の年（四年後に終結）であるが、それらの武者小路作品には、戦争に対する作者の関心が、色濃く反映されている<sup>\*18</sup>。

そこで改めて、本稿で論じた小説「不幸な男」の特質を思い出したい。戯曲「罪なき罪」から小説「不幸な男」への変容の根底には、「死のリアルな表現」の意

図があつた。また、小説「不幸な男」の素材の変形（デフォルメ）の意図には、モデルの「苦境と苦悩の明確化」があつた。そして小説「不幸な男」の主題は、「神ならざる凡人には重すぎた運命」であつた。さらにその情調は、「厳粛な暗澹たる悲哀」であつた。

本稿冒頭で引用した自説では、この中期に「現実認識のモチーフ」があること、「それによつて」「自己を生かす」哲学の文芸上の実践としての生命力表現が試された」と述べたが、このように、小説「不幸な男」という視座からは、この中期には「現実の認識」と言うよりはさらに深く、「死の認識」というモチーフが明瞭に見えてくる。<sup>\*19</sup>

そのことを念頭に置いて、再度右の創作史を眺め渡してみれば、小説「不幸な男」と戯曲「罪なき罪」のほかにも多くの作品の根底に、「死の認識」のモチーフが共通して存在するものと考えられる。

たとえば、戯曲「わしも知らない」には一族の死滅に堪える釈迦の苦痛が、小説「新しき家」には死病を宣告された主人公の覚悟が描かれ、戯曲「Aと運命」や「Aと幻影」の意欲に満ちた主人公の作家は、末尾

で不意の死に関わる。また、戯曲「或る日の事」の主人公は戦国武将として己と家族や家来の生死を夢で体験し、小説「死」と「姉（回想断片）」は作者の家族の死を描く。ほかにも「悪夢」、「小さき運命」、「日本武尊」、「かちく／＼山と花咲翁」、「AとB」などの戯曲の登場人物たちは皆、それぞれ逃れられない境遇、運命の中で死を賭けて闘う。

戦争への関心を含む小説「彼が三十の時」や、「非戦的」と言われる戯曲「ある青年の夢」にしても、それぞれの作品の根底にある「死の認識」のモチーフこそが、それらを芸術として成立させ得た礎なのだと思う。<sup>\*20</sup>（神）への長い道には、このように悲痛な（運命）の観照が必要だったのである。

#### 注

\*1 小説「不幸な男」の引用は『武者小路実篤全集』3（昭63・4、小学館）、所載の本文により、これをテキストとして用いる。本文の引用については、以下同じ。

\*2 「しかし女のことだと云ふが、それだけが人生でない」と君は云ふが、それは本当だらう、しかし僕たち、今の世に生きてゐるものには、女の不貞は致命傷になり兼ねない。

もつと世が進んで自分達に何かしなければならぬことがあればそれは別だ。君の仕事は又別だ。」とある通り、社会における別様の理想的な男女のありようが、ここでは示唆されていることには注目しておきたい。

\* 3 語り手の面からこの小説を考えると、語り手は超越的位置にあつて、必ずしも主人公の代弁者であるだけではない。(十)では、語り手は田島の知り得ぬ事実を述べているようだ。「妻の不貞、それは夫にとつては耐へられないことだ」、また「事件は簡単に無邪気に起つたと云ひたい、しかし結果は簡単に無邪気に、笑ひ話にはをさまらない」という叙述などは、主人公の内的独白に見えながらも、ひそかに主人公の背後に寄り添って立ち、その不吉な予感を実現に導く暗い運命の言葉のようでもある。語り手の優れた技巧と云えるだろう。

\* 4 戯曲「罪なき罪」は、一九一四(大正三)年二月に脱稿、翌月の『白樺』に発表、翌一九一五(大正四)年二月に洛陽堂から刊行された『彼が三十の時』に、またその翌年の一九一六(大正五)年四月に新潮社から刊行された『小さき世界』に再録された。

\* 5 自伝的小説「或る男」は、『改造』大10・7〜12・11に断続的に掲載された。引用は、『武者小路実篤全集』5(昭63・8、小学館)、237頁下〜238頁上に拠る。

なお、「罪なき罪」という題名は、その発表の二ヶ月前の一九一四(大正三)年一月に帝国劇場で上演された、武者

小路が畏敬するストリンドベリの戯曲の邦訳題名「罪又罪」のオマージュとも考えられる。

\* 6 創作集『彼が三十の時』(大4・2、洛陽堂)「自序」の引用は、『武者小路実篤全集』2(昭63・2)、小学館、327頁下に拠る。

\* 7 戯曲「罪なき罪」の引用は、『武者小路実篤全集』2(昭63・2、小学館)、225頁上に拠る。

\* 8 小説「世間知らず」(大元・11)のモチーフの一つには、妻をモデルとした登場人物、C子救済のチーフがある。

また、「Aの手紙三つ」(『白樺』大元・12)からは、モデルと創作に関わる複雑な事情が伺える。詳細は本文冒頭に挙げた寺澤著書第四章参照。

\* 9 「序のかほり」は、我孫子刊行会本3(大6・7)に掲載されたもの。引用は『武者小路実篤全集』3(昭63・4、小学館)、177頁下に拠る。

\* 10 志賀直哉日記の引用は、『志賀直哉全集』12(平成11・12、岩波書店)、251頁下〜252頁上に拠る。

\* 11 なお、志賀直哉の小説「范の犯罪」の創作意図は、武者小路とはだいぶ異なっていて、次のようなものである。「私の近い従弟で、あの小説にあるやうな夫婦関係から自殺して了つた男があつた。私は少し憤慨した心持で、どうしても二人が両立しない場合には自分が死ぬより女を殺す方がましだつたといふやうな事を考へた。気持の上で負けて自分を殺して了つた善良な性質の従弟が齒がゆかつた。

そしてそれに支那人の奇術をつけて書いたのが『范の犯罪』である。』（『創作余談』（『改造』昭3・7）、引用は『志賀直哉全集』6（平成11・5、岩波書店）、205頁）。また、里見の小説「恐ろしき結婚」は志賀や武者小路の作品とはさらに異なり、妻の過失というモチーフはない。

なお、これらの作品を独自の観点から比較した研究に、伊藤佐枝「日本近代文学に於ける〈親密性テロリズム〉の様相・序説——志賀直哉『范の犯罪』とその周辺を起点として——（前篇）」（『論樹』19、平17・12）などがある。

\*12 小説「不幸な男」（三三）の猫を撃った後の描写は、「どうまいだらう」夫は気ぬけしたやうに自慢した、そして猫を見に行つた、猫は力のない声で悲しくないた。猫は喉の処をやられて居た、肉が丸と一緒にとんで喉の処の肉がはみ出て血が流れ出てゐた。彼はそれを見てぞつとした。」というものであり、気味の悪いリアリティが与えられている。代つて、（十五）の田島が自らを撃ち抜いた場面に具体的な描写はない。後の\*14に引用したが、モデルの死の場面は凄惨だったようだ。つまり、この（三三）の描写は、田島の死に様の伏線と言えるだろう。

\*13 なお「序のかはり」（\*9参照）では、武者小路不在時のモデルの訪問が「一年ぶりぐらゐ」であったこと、「その後三四ヶ月たつて友は死んだこと」などが記されている。

\*14 なお、引用部分の前には次のように記されている。  
「僕の従弟に当る男で自殺をした者がある。死んだとい

ふ知らせがあつて、行つてみると自殺だった。二階の部屋で、床柱に寄つかかつて、日頃遊蕩をやる男だった。霰弾のつまつた銃口を口にくはへ、足で引金をひいたので、天井も血になる、床も血になるといふえらい騒ぎだった。

原因についてはそれまで何も知らなかつた。／あとで聞いた話によつて、大体の筋をいふと、自殺した従弟をAとすれば、Aに学校時代同級でお互に一番二番を争ひ合つたBといふ親友があつた。そのBが自分の従弟と関係し子供の出来てゐることを知らずに、従妹を自分の友のAにすすめて二人を結婚させた。ところが、結婚してから相当時が経つて披露があつた。妙な時にあるとその時も感じ、あとで思ひ合はずと一層ハッキリしたのだが、結婚するとすぐつはりがきたのだ。子供もむろん早く生れた。／AもBも二人とも華族で、それが親しい友人の間柄であり、表沙汰にはならないで、Aは自分一人で煩悶してゐた。しまひにAはその母親に相談したが、母親は『思ふ通りにしろ』と云ひ、年のちがはない弟は事勿れ主義で、『うちのために我慢をしろ』と云つてゐた。母親といふのはなかくのしつかりもので、『思ふ通りにしろ』と云つたのは、離縁するならしるといふ意味だった。この時に、もしもやはり同級でよく知つてゐた武者なり、僕なりに相談したら（さういふ場合は大概あとからさう思ふものだが——）、何とかなりはしなかつたかといふ気がする。残念に思ふ。」（『改行、筆者注』。談話『范の犯罪』に就いて（『現代』昭10・3）

の引用は、『志賀直哉全集』6（平成11・5、岩波書店）、373頁～375頁に拠る。

\*15 後に「二十八歳の耶穌」と改題された。

\*16 後に「初恋」と改題された。

\*17 後に「ある青年の夢」と改題された。

\*18 あえて例示するまでもないが、小説「彼が三十の時」には、主人公が出征兵士の喚声に、異様な興奮を覚える場面がある。戯曲「その妹」の主人公は、戦争で視力を失った画家が主人公である。戯曲「ある青年の夢」の主人公は、戦死者の集会や反戦劇の場などに導かれる。

\*19 遠藤祐は「人間の内的な葛藤」への「関心」の表れとして「桃色の室」を筆頭に、大正に入ってから「その妹」（四年）「不幸な男」（六年）「友情」（八年）「愛慾」（十五年）とたどられる作品の系譜。「武者小路実篤——「白樺」時代を中心に——」（『国文学』昭34・2）があることを指摘している。私はそこに武者小路文芸の劇的様式を見るが、それは〈現実の認識〉と云うよりも、〈死の認識〉と云うことによつて、さらに明瞭になる。

\*20 最近の論では瀧田浩「武者小路実篤「ある青年の夢」論の前提——非戦文学の評価と同時代の非戦言説をめぐつて——」（『松学舎大学人文論叢』85、平22・10）がある。「非戦」に文芸としてのリアリティが保証されるのは、〈死の認識〉の文芸的表現の達成いかんによるものと筆者は考える。

なお、\*5で少し触れたが、武者小路文芸のこのような創作様式にはストリンドベリの影響がある。詳細は、本文冒頭に挙げた寺澤著書の「人物の相克と人生の必然の表出」（第八章、188～191頁）を参照されたい。